

6. 押堀（おっぼり）と落堀（おとしぼり）

(2016.11.4 改訂)

押堀とは、まさに一夜にしてできた大洪水の痕跡。排水路の意となる「落堀」とは区別しよう。

堤防が決壊して洪水が激しく流れ出すと、決壊地点付近の地面は深くえぐられます。そのあとに水がたまったところを、古くから「押堀（おっぼり）」とか「切れ所沼（きれしょぬま）」とかよびならわしてきました。実はこの地形は各地に残されており、釣り堀として利用されているところもあります。2011年の東日本大震災の際、利根川の下流域では押堀が埋め立てられた跡地で液状化が発生したことが報告されました。2015年の鬼怒川水害時にも、堤防決壊地に大きな押堀がつけられました。

国土交通省の「治水地形分類図」でもこの地形が示されているのですが、地形名称として「押堀」ではなく「落堀」という字が使われています。しかし、本来「落堀」は「おとしぼり」と読み、排水路を意味します。埼玉県には「大落（おおおとし）古利根川」という利根川の旧流路や、「〇〇落（おとし）」という名前の排水路がたくさんあります。「落堀（押堀）」と書かれているものもありますが、かえって混乱するので「押堀（おっぼり）」あるいは「おっ堀」に統一すべきだと考えます。

(久保純子)